

動きによる表現、それは芸術

町永一美さん 舞踊家・コレオグラファー（舞踊振付師）



プロフィール：東京都厚木出身。

杉並に暮らして10年、杉並区堀ノ内在住。

小さい頃から踊ることが大好きで、4才の頃からダンスを習い始める。松下電器、サントリーなどの大手CM、モーターショーなどのイベント、日本ハムファイターズガールなど数々の振付けを手がけながら、ブロードウェイダンスセンター（BDC）や劇団四季で講師として若手を育成中。

西荻窪のスペース35でK'z Dance(ジャズダンススクール)を開校中。<http://www.kzdance.com/profile.html>

北海道日本ハムファイターズ ファイターズガール・プロデューサー。

■物心着いた頃からの エンターテイナー



▲ダンサーの振り付け師としても活躍

町永さんとは、4年前、北京のイベントで一緒にご縁からだった。日系企業が出展する国際展示会で、彼女は中国人ダンサーへの振付け、私は通訳としてほぼ10日間を一緒した。同じ杉並在住と言うことや、当時私は阿佐ヶ谷でエアロビクスを熱心に行っていた頃だったから、とても親近感を感じた。

今回インタビューをして、びっくりしたのは、町永さんの徹底したダンスとの関わり合い方。幼稚園の頃からダンスを習い始め、小学生の頃には、榊原舞踊団で日本舞踊とクラシックバレエをやったそう。ジャズダンスは映画「フラッシュダンス」と共に一世を風靡したが、バレエの基礎も日本舞踊もというの少ないのではないだろうか。そして、大学は舞踊科。ジャズダンスを本格的に、そしてインストラクターのキャリアが始まったという。

「NYでおどりがたくて、おどりがたくて。」まずは、フロリダのディズニーワールドで、「藤娘」を。「日本舞踊をやっていたおかげです。」と言うが、それにしてもオーディションの倍率は高かったことだろう。そしてディズニーワールドとの契約期間が終わったら、すぐにNYへ直行。ブロードウェイの舞台に立つダンサー

達もレッスンに通うブロードウェイダンスセンターやSTEPは、オープンクラスというシステムで、チケットを購入して希望のクラスに誰でも参加できるという開かれたスクール。日本のように、「先生」や「師匠」について弟子として学ぶのとは大きな違いだ。町永さんも、そういったスクールでレッスン三昧、その合間にミュージカルを見るという、忙しい、充実した日々。本場のNYでの切磋琢磨が、自信に満ちた彼女の目の輝きを作り出しているのに違いない。

■やがて、コレオグラファーとして

1984年、ブロードウェイのオープンクラスのシステムを採用したダンススタジオが東京に開校した。その名も「ブロードウェイダンスセンター」。当初は、レッスンを受ける立場だった町永さんは、やがてインストラクターとして抜擢される。大学在学中からジャズダンスを教えてきた彼女は、自分もプロクラスで学びながら、新人達を教えるインストラクターとして実績を積んでいった。そして、初めてのコレオグラファーとしてのデビュー。海外ダンサーのステージの1曲を振り付けることとなったのだ。典型的な“A-boy-meets-a-girl”ストーリーのミュージカルの1曲だった。「だから、もうすでに演出やイメージができあがっていました。男の子と女の子が電話を通じて展開するラブコメディ。その雰囲気に合わせて、電話を持って踊ってもらうなどの振付けを凝らしました。今でも覚えてますよ。」昔を懐かしみながら話す町永さんの瞳には、一つ一つの動作が再現フィルムのようにまわっているのだろう。

その後、ロコミを通じて、「コレオグラファーとしての町永」が活躍していく。多くの大手企業のテレビコマーシャルも手がけてきているが、「いつまでも芸能界に残っている人って、

本当に努力している人たちなんだなあって思います」。例えば、田中邦衛さん、当時はドラマ「北の国から」でお忙しかっただろうに、監督もOKを出し周りが大きな拍手をしても、自分が納得いくまでリテイク。「アノロ調で、『だめだめ、もう一度。』『もう一度、撮ろうよ』。物まねは意外に下手だった町永さん(失礼)。西城秀樹さんから、「町永の後ろからカメラ回して撮って」「え？後ろから撮ってどうするんですか？」「だって、見るのはこっち側からだから、家で練習するのにそのほうが良いでしょう？」多忙なスケジュールをこなす中、家でも練習をするというそのプロ意識には脱帽したそう。また、海外ダンサーへの振付けも少なくない。「インドの方への振付けの時は、インド独特の首を振る動作を取り入れたり、北京では、one two three が通じなくて、中国語で1、2、3、と数え方を学びました」とのこと。中国では通訳を介して振り付けたそうだが、「でも、動いてみせれば、通じるんです。ダンスは世界共通。」国境を感じずに振付けができるのは、人種のるつぼNYでの経験がものを言っているのではないかと思う。私も何度かカナダ人やイギリス人のコレオグラファーと仕事をしたことがあるが、町永さんはもっと国際性を感じさせる。というよりも「国境」を感じさせないのである。





■舞踊家として、踊る、振付けをする、そして、若手育成



▲日本ハムファイターズガール

ダンサーとして踊る、ダンサーに振付けをする、ダンスを教える、その意識に、最近加わった新しい考え方、「もっともっと広げたい」という気持ち。例えば、プロ野球シーズン開幕とともに、彼女が育ててきた日本ハムファイターズガールのパフォーマンスが披露されたが、「これで終わりにしないで、ここを出発点にして、ダンスに関わって行ってもらいたい」と町永さんは語る。ファイターズガールは、全員ボランティアで構成されるが、中には、「もっと続けたい(プロを目指したい)」と町永さんに相談する女の子も出てきた、また、「大きくなったらファイターズガールになりたい」と夢を語る小さな子どもも増えてきた。自分が育てたダンサーが、その地域でさらに多くのダンサーを生んで行って欲しい。ダンスへの情熱という町永DNAが各地に根付いて欲しい、という気持ちである。

「札幌では、日本ハムファイターズガールに100人以上が応募してきたんですよ。」と当時を振り返る町永さん。ダンサーとしてプロを目指す人々は普通は東京に集まってくる、東京以外には「プロ」を目指すダンサーは少ない。応募者の中から26名を選び抜き、アマチュアダンサー達を育成する。その「育成」に悦びを感じるという。同時期に、九州のスペースワールドというテーマパークのステージの振付けの依頼もあった。北と南の東京から遠く離れた地域にジャズダンスの「芽」を植えた。そして、それらは確実に根を生やし、育てている。そして、町永さんの願い通り、種をまいていこう。

■杉並に暮らして、杉並で教えて

杉並で暮らし始めて10年。西荻窪のダンススタジオK'z Danceは、彼女の経営するダ

ンススクール。キッズクラスからの受講生も今では通常(成人)クラスで定期発表会のリハーサル(杉並セッションにて)に忙しい。

お休みの時は何をしていますか？
「そうですねー、ディズニーランドにも行きますよ」ふむふむ「ステージを見て参考にしたり」それはお休みではないのでは？ ダンス以外のことをすることはしないんですか？ 「えーと、ダンス以外？ うーん、自然が好きなので、冬はスノーボードとか温泉とか。温泉いいですねえ」インタビュー中初めて出てきたダンス以外の話。そんな町永さんからのメッセージは、「ダンスをもっと知って欲しい」。ダンスは古代からのスポーツである。皆さんも是非楽しんで欲しい。

さて、リハーサルによく使う「セッション体育室」は、料金も安く設備が整っていて本当にありがたいとのこと。「さざんかねっと」で手早く申し込んで活用しているそうだ。

杉並は、人間らしく生きられる場所だと思う。私が関わった杉並の人々はみんな「人どう関わればいいのか」を知っている人たちだった。「セッション」のような公共設備だけでなく、商店街や公園、交通機関など、人に優しいものが多いのが杉並の特長ではないだろうか。町永さんは、そんな杉並でエネルギーを充電し、今後も日本中へ世界へ発信して行って欲しいと思う。